

Shiripaの星

[シリパのほし]

北星学園余市高等学校同窓会誌



会報の発刊をお祝いして

校長 深谷 哲也



同窓生の皆さん、お元気で全国各地でご活躍のことでしょう。心からお慶び申し上げます。今回、同窓会会報が発刊されることになり心からお祝いを申し上げます。

本校は昭和40(1965)年の創立ですから、1期生は52歳くらいでしょう。同窓生数は5878名になっています。

1988年から全国規模で、高校中退者や不登校の生徒を全国で初めて受け入れ、有名になりました。一度や二度の挫折で負けることなく、希望をもつて頑張れば必ず立派に成長することを本校の教育は実証しています。

全校生約600名の65%は道外生であり、85%は寄宿生です。余市町内外の本校指定の44軒の寮・下宿にお世話になっています。又、学園祭や強歩遠足には400名近い父母・家族が生徒の活動を応援しにやってきます。10月から12月の土・日曜日には全国各地で生徒募集のための本校の学校説明会・相談会を開いています。近くであれば顔を出していたく大変嬉しく思います。

近年、日本の少子化の中で毎年約200名の生徒募集は難しくなりつつあります。

お近くで、知人で進学のことでお悩みの方がいましたら、全国で一番面倒見の良い本校をお勧め下さい。

同窓生の子弟も本校にたくさん入学しています。本校教師の子も何人も本校を卒業しています。

毎年この会報や母校の様子を皆さんにお知らせできることをお祈りしています。

同窓生皆様のご健康とご多幸とご活躍を心からお祈りしております。

創刊にあたって



同窓会長
馬場 希(第12期)

北星学園余市高等学校が1965年に誕生してから今年で37年目を迎えます。この間の卒業生は5878名となり、北星余市の教育を受けた多くの仲間達が北海道だけではなく全国に広がり、社会形成の一躍を担う一人として活躍しています。

会員の皆さんも北星余市の状況については、少なからず新聞・マスコミ等の報道で、その教育活動の実践と成果はご理解頂いていることと思いますが、この間、同窓会としても北星余市を支える活動として、十分とは言えませんが在校生への学内活動支援や会員への情報提供として名簿の整理等を行ってきました。

しかし、「同窓会は何してるの?」という会員の声も少なくありません。このことは、在学中に限った会費徴収といった財政面における制約もありますが、会報誌等会員に十分な情報提供を行えなかったという同窓会執行部の反省すべき点もあります。

このため、現在学校側の協力を得て、収益事業の検討を行うと共に、新たな同窓会事業の展開を計画しております。今回その一環として年1回の発行ではありますが、会報誌「シリパの星」を創刊する運びとなりました。これを機に会員相互の情報交換や、先生や学校の情報を皆さんに提供して行きたいと考えております。

今後とも同窓会活動にご協力をお願いすると共に、北星余市を支える1人として会員の皆様のご支援を宜しくお願いします。

あS・HのI・R・Iは・A今



えっ！ 村長さん！

第1期生B組 筒井末美 氏

本誌創刊に当たり、細川たかしと百合根の里として羊蹄山の麓に広がる真狩村に第1期生で初代同窓会長である筒井氏を訪ねたところ、なんと第6代の真狩村長となっていた。多分、同窓生で行政のトップとなっているのは彼だけだろうと思う。しかし、以外にも古くから彼を知る友人によると、「俺は将来真狩村の村長になる」と宣言していたようで、それを実現していたのである。

早々高校時代の思い出を聞いて見ると、転々とした下宿先、仮校舎での授業、新校舎への移転などあまり沢山ありすぎて難しいようであったが、「退学になった仲間の復学運動を丸となって取り組んだ事」、「学校で平和教育を受けたこと」を上げ、熱く語ってくれた。こんなところにも北星余市の教育理念が見えた。

村長としてのむらづくりに対する思いも聞いてみた。「少子高齢化・行革・市町村合併等々困難な課題は沢山あるが、福祉を充実させ、次代を担う子ども達への教育環境を整備すると共に、産業基盤である農業の振興が真狩村の基本である」と具体的に様々話を聞かせてくれた。

最後に、北星余市の

子ども達へとして「雇用等厳しい時代であるが、自分の思う仕事に就き、社会に貢献することが幸せに生きる事だと思っている。あせらず自分の進むべき道を北星余市で見つけたしてもらいたい。」というメッセージを貰い、筒井氏の更なる活躍を願いながら晩秋の真狩村を後にした。



現在も母校で奮闘中

第1期生C組 安藤栄子(旧姓打矢) さん

覚えていますか？ 卒業生で、先生の名前は忘れても、「職員室の安藤さん」を知らない人はいないでしょう。

母校に勤務して28年。すき間風と石炭ストーブが懐かしい旧校舎の時代から現在に至るまで、ずっと変わらないのが、あの美しい笑顔と若々しい声、そして忙しく職員室を走り回る小柄な身体。アツ！ それからチョット寒いジョーク。

変ったことは、視力2.0が老眼に、肉体は危険信号発信中といったところかな。また、母親としても長男を立派に自立させ、今は、次男(中2)を楽しく子育て中で、若い母親達と一緒に奮闘中です。

そんな最近の安藤さんの職場での様子は、というと、本来の業務に加え、生徒の相談相手になったり、他校では考えられない連日多くの来客の対応など、以前にも増して忙しい日々ようです。ゆっくり昼食をとる時間すらないのが現状です。

今回起きた母校の存続をゆるがす様な事件に、私達卒業生が強い怒りと悲しみを感じている様に安藤さんは更に、世間の反応に対応し、言い知れぬ思いをしておられると思います。

「私は北星バカなの」と彼女はいます。母校を愛し、日々奮闘する姿勢には、すばらしい先輩として見習い、拍手と感謝状を贈りたくります。優しく暖かい眼差しで生徒を見つめ、仕事に妥協をしない自分に厳しい安藤栄子さん。北星余市高校にとって、必要不可欠な人なのではないでしょうか。



今はダンスが生き甲斐

初代用務員 見上信勝 氏

北星余市高校が創立されたときから用務員として働いてきたのが見上信勝さん。定年を迎えるまでの20余年、裏方として北星余市を支えてくれました。見上さんの今を直撃インタビューしました。

見上さんは現在74歳。剣道の腕前は相当なもので、在職中は剣道部のコーチとして部員の指導に当たっていました。しかし、昔、腰の手術をしたこともあって、腰痛のため10年ほど前に剣道からは引退しています。今は若いときに覚えたダンスを生き甲斐に毎週土曜日はレッスンに通うほどの熱心家です。日常は庭木の手入れをしたりしていますが、1日の暇な時間をどう過ごすかと始めた習字は1日2、3時間、ときには朝から晩までのときもあるとのこと。上手になろうという意識ではないが、般若心経を書写するまでになっています。

北星余市時代の思い出はたくさんあるけれど、強く印象に残っているのは、旧体育館のステージづくりとのこと。かつて学園祭のステージが旧体育館にあったとき、生徒用の机の上に教壇を載せるとちょうどステージの高さと同じになり、狭いステージを広げることができました。このアイデアは見上さんが思いついたとのこと。思い出せば、あのアイデアは毎年の学園祭に引き継がれ、ステージづくりの定番となっていました。

最後に同窓生に一言をとの求めには、「若いうちに好きなことに熱中してほしい」でした。見上さんの益々のご健勝をお祈りいたします。



「北星と共に再び」

北海道平和委員会事務局局長
安達尚男

創刊号への寄稿を求められ、改めて教員第2期生として一緒に就任した5人のメンバーのことを思ったが、余市に残っているのは僕ひとりさみしい気もするが、やはり北星とは縁が切れないのかとも思う。20年間の教員生活を終えて、ただひたすら平和運動に専念する事を夢みていたが、現在は、1年前に安達俊子が退職直後に決心して始めた青少年自立支援センター「ビバハウス」の仕事に追いまわられている。もととは、北星の卒業生の社会的自立を支援する為、彼女の退職金を全部はたいて始めた仕事だったが、今日もNHKの「クローズアップ現代」大人の引きこもり」でもやったが、何しろ全国に百万人の引きこもりがいるというのだから大変だ。事実、元教員の夫婦が24時間365日若者と一緒に生活するところは全国にはないとの事で、明後日には、北星のテレビで俊子の事を知ったと親戚の人が電話してきた大阪からの26歳の青年が来る事になった。

これで17歳から33歳までの男性5人、女性3人を受け入れることになるが、毎日が挑戦と挫折の繰り返しに他ならない。彼らにとって、どんなにささやかでも、何か新しい仕事や任務につくという事は、信じられないほどの重圧を受ける事、果たして自分より抜けるかを考えただけでも、手も足もすくんでしまうほどの難題である事がますます明らかになって来た。

楽しいのは、現役の北星余市の高校生や卒業生がボランティアや遊びに大勢で俊子に会いに来てくれる事。また最近では、来年初星の編入試験を受けたので、是非それまでいさせて欲しいと言う子が出て来たり、かつて自分の息子を余市に送ってきてようやく北星を卒業させてもらった僕の東京の弟から、知り合いの中学3年生を、家族の事情があるので、本人



のために出来るだけ早く余市の中学校に転校させ、来年北星を受けさせて欲しいなどの問い合わせが次つぎにあること。体の条件や、大勢の人とは一緒に出来ないなど様々の事情で、他の生徒のように、北星に通えない子供達にも、「北星の教育」を受けられる場、いわば、北星余市高の「分教場」のようなものもいずれば必要に成るのではないかとも思うこの頃で、どうやら北星余市高との縁はますます切れそうもない。

北星余市高同窓会報

「シリパの星」創刊に寄せて

北星学園余市高等学校
教諭 山岸 栄

創立37年目を迎えた今、卒業生の皆さんには、厳しい社会状況の中、日夜奮闘されていることと思ひます。

卒業生の皆さん方には、平素陰に陽に本校を初め、本校生に対して同窓会組織を通して、ご支援をいただき大変感謝致しております。

この度、創立以来初めて、会報誌「シリパの星」が創刊される運びとなり、心より嬉しく思います。

一昨年の1期会、昨年の2期会にご招待を受け、久しく皆さんとの懐かしい時間を過ごさせていただきましたが、社会人として立派に活躍されている報告を受け、大変頼もしく感じました。

思えば、5800名を超える数の卒業生が、社会人として巣立っていった本校ですが、現在全校生徒600名近い数に増えています。これも、学校創立当時の1期生から3期生頃迄の皆さん方の、自分達の手で「学校作り」をと、血と汗の努力の結果が、今日の本校の基礎を築いてくれたものと確信しています。不自由な旧校舎での生活を送られた23期生迄の皆さんは、苦勞しながらも沢山の思い出の数々を秘めて卒業されていった訳ですが、きつと懐かしく思い起こされ、お子さん達に語られておられるものと思ひます。

また、新校舎が完成し、教育環境が整った中で学校生活を過ごされた皆さんも、違った意味で思い出を噛み締めながら、日々それぞれの置かれた立場で、健闘されているものと思ひます。

私も、後1年で定年を迎えるところ迄来ましたが、最後まで責任を果し、卒業生の皆さんの期待に応えたいと思ひます。この会報の創刊を機に、皆さん方の交流の機会が増え、本校へのご支援が寄せられたなら、心より嬉しく思う次第です。卒業生の皆さんの益々のご健勝と、ご活躍を心より祈念し、挨拶に変えたいと思ひます。



同期会報告

去る9月22日(土)午後6時から、札幌ジャスマックプラザにおいて第9期生A・D組による同期会が盛大に開催された。

卒業してから早くも25年の歳月が経ち、当時を懐かしく語りあおうとこの日を楽しみにしていた仲間達が、道内外各地から次々と集まり、出席者数は総勢63名。私達が卒業後に校長として活躍されたA組の馬場達先生、当時の担任の内、唯一現役で頑張っているB組の吉田一先生のお2人が大変忙しい中駆けつけて下さり、一段と会場の雰囲気も盛り上がった。皆どんなふうにかわつたかなと、仲間達の顔を思い描きながら入った宴会場。記憶にあるのは若い高校生の顔。頭の中で比較してみるのだけれどもなかなかうまく重なってこない。容姿がすっかりおじさん、おばさん化したしまったため、「おい、あいつ誰だか分かるか。知っているふりして話してたけど名前がでてこない」とか、「あなたは誰でしたっけ?」「そっちこそ誰だっけ?」「名前はえーと」と言うような会話が飛び交ったのも束の間、すぐに話し方も態度もすっかり当時の高校生に戻り、各組関係なく入り混じりの状態で、懐かしくて懐かしくて感極まり涙する者、写真を撮り合う者、次から次と出てくる料理に目もくれず話込んでいる者...

昔話に花を咲かせ、心と気がつくアツという間の2時間。これだけの人数ではどこにも場所を移せないため、幹事が機転を利かせ2次会もその場でそのまま行うことにした。どうしても帰宅せねばならない1名以外全員参加。しかし、楽しい時間は過ぎ去るのも早く、いくら時間があっても話は尽きない。何時までも去りがたい気持ちは皆同じであつたが、今度また3年後に同期会を行うことを全会一致で決め、全員後髪を引かれる思いで会場を後にした。今回はD組の山下正明さんの呼びかけに快く応じて、幹事を引き受けてくれた方が各組にいたため実現できたことであり、集まった仲間たち皆が幹事に感謝をしていた。



就学援助金50000円(月額)を支給

子供に北星余市を勧めよう

北星高校が余市に教育の灯をともしてから37年。生徒の出身範囲は後志から札幌圏、そして全道・全国へと広がってきています。同窓会も1期生から34期生まで現在5878名の会員を擁するまでに発展してきました。ここ数年の間に同窓会員の子どもも北星余市に毎年入学する状況が見られます。一方で、「子供を北星余市に入れたいが、公立に比べると授業料が高いので、家計を考えると躊躇してしまふ」「やはり北星に入れたいが、お金のことを考えると公立に入れざるを得ない」という声が聞かれます。9月に行われた役員会ではこのことを議題として議論し、母校の教育活動を支援するという同窓会の目的の実現のため、会員の子どもが北星余市へ在学中、希望したときは就学援助金を支給することを決めました。なお、就学援助金は役員会を中心とした事業(校内の自販機の管理運営)による収入を元に基金を創っていくことも確認し、現在会長と副会長で校長・事務長や飲料メ

「力」と交渉に当たっています。
就学援助金の支給は2002年度在学生徒から該当するようにします。希望される方は一定の手続きが必要ですので、同窓会事務局まで申し込んでください。

連絡先…事務局(担当…安藤栄子)
TEL…0135-23-2165
FAX…0135-22-6097



10月下旬に報道された

薬物問題について

新聞・TV等で報道された大麻を含む薬物問題について同窓生の皆様には何かと心配をお掛けすると共に大変お心苦しい思いをさせていることと思います。学校側としては、薬物問題に限らず生活全般を含め、処分された生徒達だけではなく、真に自分たちの問題として受け止め、教師・生徒がとことん議論を重ね、警察及び教育関係機関とも協議を進める中で、「この問題は教育現場における指導範囲である」として、現在全校一丸となり生活改善活動に取り組んでいます。

皆様におかれましては、教師一人一人の顔を思い浮かべながら、学校の自己再生能力に期待し、引き続きご支援を宜しくお願いします。

尚、事件の詳細や対応については北星余市高ホームページに掲載しておりますので一読願いたいと思います。

(事務局)

同窓会の歩み

- 1967. 5 同窓会結成 初代会長 筒井末美(1期)
- 1969. 4 同窓会会則
- 1974.10 北星余市高校創立10周年式典
- 1976. 1 定期総会・新年会
支部体制確立(余市・札幌・東京支部)
会則一部改正
- 1978.10 同窓会10周年記念式典(30数名参加)
グランドピアノ学校に寄贈
- 1979. 4 同期会の組織作り始まる
- 1981. 1 定期総会・新年会
- 1982. 4 2代目会長 品田敏広(1期)
会則一部改正
- 1984.10 北星余市高校創立20周年式典
同窓会誌作成
- 1994.10 北星余市高校創立30周年式典
- 1996. 7 3代目会長 伊藤賢治(7期)
- 1998. 4 会則改正
- 2001. 4 4代目会長 馬場 希(12期)
同窓会会員名簿作成

同窓会活動

- ・在校生への奨学金制度
- ・行事への援助 強歩遠足・学園祭
- 弁論大会・クラブ等(全道・全国)
- ・卒業生への記念品(筒)
- ・卒業生名簿整理



編集後記

同窓会役員として活動に携わって15年、名誉ある「編集局長」なるものに任命され、暖かい諸先輩のご指導・ご協力のもと、なんとか創刊号を発行することができました。

編集作業は余市・札幌と離れた地ということで、それぞれの職場のメールやFAXでのやりとりでしたが、「メール」は「偉大な先輩方」と「メル友」になった気分で、私の楽しみの1つになりました。

また、余市での打合せ、ニセコでの編集会議合宿もとても楽しく話題に溢れ、次号の掲載記事にまで及ぶほど大変な盛り上がりとなりました。

この度の創刊号は中々の出来だと1人悦に入っていますが、今後も更に皆様に楽しく読んでいただけるものを目指していきたいと思います。

最後に、お忙しい中早く原稿執筆や取材を引き受けて下さったOBの皆様と、レイアウトから発送までご協力いただいたアイワードさんに感謝します。(E)

原稿を募集します!!

「シリパの星」は今後年1回の発行を予定しています。そこで、

①私は今こんなことをしています。

②今度こんな集まりがありますのでお知らせします。

③あの人の消息を教えてください!

等々、皆様からの原稿を大募集します(但し、掲載は次号です)。

メール、FAX、郵送いずれでも受け付けています。どしどしお寄せ下さい。

Shiripaの星 創刊号 2001年12月1日発行

顧問 袁輪菊雄
編集長 松村 悦子(15期)
副編集長 松浦 一法(12期)
編集委員 安藤 栄子(1期)
本間美智子(5期)
馬場 希(12期)
平野満寿美(14期)

[発行]

北星学園余市高等学校「シリパの星」編集委員会
〒046-0003 余市郡余市町黒川町96番地
TEL (0135)23-2165 FAX (0135)22-6097
E-mail hokuseiy@netfarm.ne.jp